



## 日本の優れた技術を海外へ 今日も明日も現場にいたい

中島 千裕さん アムコン株式会社 ヴァルード事業部販売管理本部海外営業グループ 営業担当  
Chihiro Nakajima

協力隊活動を通じて考えた帰国後の仕事のイメージ。

決して妥協せず、自分のこだわりポイントを実現できそうな会社を探した中島さんは、  
現在、日本と海外を行き来しながら、心からその仕事を楽しんでいる。

### 強い覚悟を胸に 再び国際協力の道へ

高校生のとき、水不足で困っている途上国で日本の昔ながらの手掘り技術を使って現地の人々と一緒に井戸を掘る、日本人のドキュメンタリー番組に心を打たれた。自分もそんな現場に行ってみたい、と国際関係学を学べる大学に



入学し、青年海外協力隊員を多く輩出しているゼミにも入ったが、当時は武器になるものが何もなく、自信もなかった。「まずは就職して経験を積もうと思いました」と中島さんは振り返る。

卒業後は電機メーカーに就職。製造部で家電の生産台数の計画や部品の購入、スケジュール調整など生産管理の業務を担当した。とにかく現場が好きで、がむしゃらに働いていた中島さんだが、仕事に忙殺され、自分では気づかないほど感情の起伏が激しくなっていることを周りに指摘された。「このままでいいのだろうか。そもそも私はいったい何がしたかったんだっけ？」

学生時代の思いなどすっかり忘れていたが、自分と向き合うこと1年。29歳に

して6年9カ月勤めた会社を退職し、強い覚悟とともに国際協力の道へと舵を切った。

### すべてを受け入れ、 前進する強さを身に付けた

青年海外協力隊の赴任先は、世界遺産に登録された「棚田」のあるフィリピンのイフガオ州。すでに日本の資金でつくられた小規模水力発電所があり、もう1つJICAの支援で発電所を作るプロジェクトが進行していた。中島さんは村落開発普及員として2つの発電所の運用と、その売電利益を地域住民に還元する棚田保全基金の運用を任された。

「予めやることが決まっていました。



チーム唯一の女性だがほかの社員と同じように現場で仕事をこなす



主力商品「ヴァールト脱水機」の仕組みを説明する中島さん



販売した商品を現場で運転調整するまでが中島さんの仕事

現地のニーズを把握しながら活動を探るような村落開発普及員になれないことを知り落ち込みましたが、農民と州政府とJICAの調整役なら前職でやってきた仕事を活かせそうだと思い、気持ちを切り替えました」

真面目に取り組む中島さんについて、JICAフィリピン事務所のスタッフは「大きなプロジェクトに組み込まれてしまった隊員は普通やる気を失ってしまうが、中島さんは非常にうまくまとめている」と高く評価している。

現場で学んだことが  
自分の軸になる

帰国した中島さんは、次に働くなら「環境と水に関する仕事」「しっかりした技術を持っている会社」「技術を海外に展開していること」とターゲットを絞っていた。「世界遺産である棚田の近くでホームステイをしていて、自分の出したゴミが棚田のすぐそばに捨てられ、家から出た生活排水を庭のアヒルが飲み、それを人間が食べるのを見て、『人間って罪深いな』と思いました。知恵と技術があればもう

少し地球を汚さずに済むのに、と」

JICAの中小企業海外展開支援を受けている企業の中から、自分の希望に合いそうな会社に1社1社電話をして就職先を探した結果、アムコン株式会社に入社が決まった。

同社は下水処理場や食品、自動車など幅広い業種の工場から出る排水を処理する過程で、汚泥の脱水や濃縮、乾燥などを行う機械を取り扱っている。主力商品である「ヴァールト脱水機」は日本初の新技术を用いた脱水機として世界からの評価も高い。「私は海外営業グループの一員として、台湾、マレーシア、インドネシア、シンガポールの4カ国を担当し、月1回、1~2週間の海外出張をこなしながら当社の機械を売っています」体力の維持は大変だが、自分の裁量で進められることが増えてきたという。

「販売した商品を現場で運転調整するところまでが自分の仕事。現地の汚泥はどんなものが含まれているのかなどを確認しながら、機械の動かし方をお伝えします。私は自分の目で見たことや体験したことを自分の軸にしている、とにかく現場第一主義。現場に行くことが楽しい

中島 千裕さん プロフィール

神奈川県綾瀬市出身。津田塾大学学芸学部国際関係学科卒業後、日立アプライアンス(株)の製造部で家電等の生産管理を担当。6年9カ月勤務したのち退職して青年海外協力隊に参加。村落開発普及員としてフィリピンで活動する。帰国後はアムコン株式会社に就職し、主力商品「ヴァールト脱水機」などを販売する営業職としてアジア地域を飛び回っている。

んです」と中島さん。

最近では途上国でも環境基準が厳しくなり、工場から出る排水をそのまま垂れ流すと罰則が課せられるようだ。「罰則を回避するために汚泥脱水機を購入するお客様がほとんど。地球環境のために購入するようなお客様はもちろんいません。それでも垂れ流すよりはましだと思っています」

自分の理想と現実とのギャップを、いまは冷静に受け止めている。「実は営業職は私にとってチャレンジでした。仕事を通して人付き合いを避けがちな自分の根幹をもう少し鍛えたいと思っています」

真面目で実直な性格だが、好奇心旺盛でチャレンジャーでもある中島さん。こんな人が日本と途上国の現場をつないでいる。



世界を変えてきたのは  
いつの時代も、  
たったひとりの  
強い想いだ。

いつか世界を変える力になる。



青年海外協力隊 シニア海外協力隊